

「働く若者のワークキャンプ」

- 第1回 7月23日(土)～7月24日(日)
- 第2回 8月26日(土)～8月27日(日)
- 第3回 10月29日(土)～10月30日(日)
- 第4回 12月17日(土)～12月18日(日)
- 第5回 2月25日(土)～2月26日(日)



I 事業の背景(必要性)

現在、社会では青年の社会体験が少なく、集団活動に消極的であったり、集団活動そのものになじみず孤立化する傾向が社会問題になっています。特に、高校を卒業して就職した若者は、多様な社会体験の機会が少ないことが想定されます。

他人との共同生活を送りながら社会活動等へ参加することは、他人と交わりコミュニケーション能力を高めるなど、社会性の涵養に繋がるとされています。また、地域の教育力の低下が懸念される中、将来地域の担い手になる若者に、地域活動への関心を高め、必要な資質を身につけることが課題になります。

さらには、青年を対象にした教育プログラムが少年に比べて少なく、これを開発し、青少年教育施設や公民館、勤労青少年センターなど、青少年の健全育成に関係する機関等に普及することが当交流の家の課題であり、当事業を実施することとしました。

II 事業の概要

1. 趣旨

勤労青年が生きがいを感じたり、地域の活動に積極的に参加しようとする意欲を高めたりすることを目的に、年間を通じた週末に、共同生活を送りながら地域に出向いた奉仕活動や自然体験活動を行なう機会を提供します。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

18歳から35歳ぐらいまでの働く若者 (20名)

(2) 参加状況

<内訳>

	男性	女性	合計
20～25歳	2	0	2
26～30歳	4	4	8
31歳以上	2	0	2
合計	7	3	12

<参加地域>

静岡県御殿場市(4)・沼津市(1)・三島市(2)・伊豆市(1)・小山町(1)、東京都品川区(1)

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成(交流の家作成)(資料1)
- ② 静岡県, 神奈川県, 東京都に所在があり, 当交流の家を利用の経験がある企業に配付。
- ③ 御殿場市, 裾野市, 小山町の従業員100名を超える企業に配付。
- ④ 近隣市町村教育委員会, 勤労青少年ホーム, 勤労者福祉サービスセンターへの配付。
- ⑤ 静岡県, 神奈川県で活動している地域の青年会議所及び青年団連絡協議会への配付。

- ⑥ 施設周辺の従業員数 200 名を超える企業に直接訪問による参加依頼。
- ⑦ 県内および首都圏での新聞掲載を依頼。

3. 日 程 (例：第 1 回 「チャレンジ自然体験活動！」)

23 日 (土)	10:10		10:30		12:00		13:00		18:00		20:00		21:30	
		オリエン テーショ ン	出会いの ゲーム		昼 食	仮眠			夕食 入浴 準備	出発		登山開始 (須走口 5 合目)		
24 日 (日)	5:00		7:00		12:00		13:00		14:00		15:00			
	山頂・朝食 (ご来光)		下山開始		5 合目 到着		移動 (交流の家へ)		目標作り 次回の計 画		(解散)			

4. 内 容 (活動の様子)

(第 1 回)「チャレンジ自然体験活動～出会いの富士登山～」山岳ガイド：山ぼうし 岩田氏



- ① 初めて会う仲間とともに富士山山頂を目指し、お互いに励まし合いながら登頂することで、自分に自信を持ち、仲間との絆を深めました。
- ② はじめはお互いに声を掛け合うことなどできなかった参加者が、7 合目を過ぎたところから高山病に苦しむ仲間を思いやり、全員で山頂を目指そうと仲間を励まし、自然に力を合わせて登山に臨むようになりました。
- ③ 1 名の参加者は 9 合目手前で下山をしたが、その後山頂から戻って来る仲間を出迎え、仲間の健闘を讃え、下山した仲間も山頂に行けなかった者の頑張りを讃えるなど、富士登山を通じてお互いの気持ちを理解し合い、仲間とともに活動することの喜びを感じることができました。

(第 2 回)「チャレンジ！地域ボランティア活動Ⅰ」 《秩父宮記念公園内除草活動》

- ① 地域の記念公園において、園内の除草作業に人手が足りず、ボランティアを募集していただくため、地域の実情を理解する機会として活動しました。
- ② 施設の方から依頼された範囲の除草活動をするにあたって、各自が自由に行なうのではなく、その作業手順を話し合い、仲間との合意形成を図りながら効率よく作業が進むように考えて行ないました。
- ③ 夕食を参加者が自分達で考えて、買い物から調理まで計画的に行ないました。調理、食事をしながら同世代の仲間と各人の人生観や悩み、職業観などを語り合うことで他人の考えを理解し、人との関わりを考えることができました。



(第 3 回)「チャレンジ！地域ボランティア活動Ⅱ」

《御殿場市市民交流活動：

元気わくわくごてんばフェスタ 2011 ボランティア》

① 地域で行なわれた町づくりの一環としての市民の交流活動に体験のブースを出展し、「体験の風をおこそう運動」としてストラックアウト、バトンバランス、どんぐり移しの3種目を会場に来てくれた子ども達や保護者の皆さんに楽しんでもらいました。

② 参加者がそれぞれの種目を一人で担当して、遊びにきた子どもたちの目線まで腰を落とし、優しく話しかけて子どもたちの明るい笑顔を引き出していました。

③ 参加者は市町のイベントがその地域の人々の努力によって行なわれていたことを知り、それぞれ自分達の暮らす地域でのイベントへの関わりについて考えました。



(第4・5回)「チャレンジ! 地域ボランティア活動Ⅲ・Ⅳ」 《市内独居老人宅訪問, 大掃除, 庭木の伐採・片付け》



① 年末の一人暮らしのお年寄りの自宅に訪問し、高齢者との交流を深めるとともに、高齢者にとって日常の掃除が重労働であることや、地震をはじめ災害に対する不安を持っている人が多いなどの高齢者の生活実態を理解しました。

② 一人暮らしの自宅はその多くが2階建ての一軒家であり、数多くの窓清掃、室内の広いキッチンや油まみれの換気扇を取り外しての清掃、庭にひろがる植木の剪定、同じく庭に立つ樹木の伐採などとても高齢者が一人のかたづけられる内容ではなく、これらは、ボランティア活動として地域の担い手である元気な若者達

が活躍するべき役割であるということを考えました。

③ 一人暮らしのお年寄りとの会話の中で、昔の人々の暮らしにあって今はなくなってしまうような大切な部分について聞き、参加者が自身の現状の生活をあらためて見直し、今後の人生観や生活の改善について考えました。

④ 参加者は自分達と話をしている時のお年寄りの楽しそうな笑顔を見て、日頃、一人で生活をしているお年寄りの気持ちを理解し、今後、お年寄りに対し何ができるのかを考えました。



○まとめ(各回の夕食時及びキャンプ終了時に実施)

- ・ 各回の夕食時、及び終了時には、キャンプ中の活動でどんなことを考えていたのか、感じていたのかなどを自分自身で確認し、参加者同士が発表し話し合うことで、自分では気づかない所を確認するための振り返りをしました。
- ・ 次回のキャンプの内容について意見を出し合い、参加者が実際に考えていることを聞き、次回の活動に主体的に取り組むことができるようにしました。

5. 評価

(1) 評価の方法(アンケート調査の実施)

- ・ 各回ごとに参加者に対して、参加の動機、期待していたこと及び、参加して感じたこと、自分自身が変化したこと、次回の活動に対する希望など、アンケート調査を実施しました。

(2) 結果

(自由記述による感想：全体)

- ① 「職場以外の場所で同世代の友達ができただことに対する喜びはとても大きいと答えている。」
- ② 「参加してみると良さがわかることが多いが、もう少し参加者が多ければ、もっと仲間との交流も多くなり、すばらしいキャンプになったと思います。」
- ③ 「社会人になって、職場以外の人と話をする機会がなかなかないが、今回事業に参加してみて、新しい人と会っていろいろ話をしたり、みんなで一緒に一つのことをやるのは達成感や充実感が得られて自分の可能性が大きく広がっていく感じがしました。」

(自由記述：各回のキャンプ)

- ① 苦しかったけど、仲間と励まし合って声を掛けて登ったら山頂まで行けて感動した。社会人になってなかなか余裕もなく、休日に外に出ることも少なくなってしまうていたけれど、思いきって参加して良かった。(第1回)
- ② 本当に困っている人たちの手伝いをして、「ありがとう」と言われたのがとてもうれしかった。こんな自分でも役に立てることがあると思って自信がついた。
- ③ 仲間と一緒に一つの作業をすることで、お互いの動きを見て、気持ちを感じながらお互いを気遣う気持ちを持つことができて良かった。
- ④ ボランティアってとっても気持ちがいいと思った。(第2回)
- ⑤ 初めての子どもたちと接する機会、不安でしたが私と一緒に楽しそうに遊んでいた子どもの笑顔がとてもうれしかったです。自分でも気づかなかった部分を、発見でき貴重な経験でした。(第3回)
- ⑥ 子どもにとって小さい頃から体を使って外で遊ぶことが、とても大切だと感じ、自分の子どもができたらいろいろな体験をさせていきたいと思いました。(第3回)
- ⑦ 一人暮らしのお年寄りと一緒に掃除をしていて、お年寄りが何を考えたり、何をしたいのか、考えてみるようになりました。今まで考えたこともなかったです。
- ⑧ 人生の終盤を迎えて、独居老人の寂しい気持ちが痛いほど伝わってきました。私たちができることは何だろうと真剣に考えました。継続して実施することで、もっと多くのお年寄りの楽しそうな顔を見ることができたらうれしいです。
- ⑨ 一人暮らしのお年寄りにとって、地域とのつながりを持つことが重要だと感じました。(第4,5回)

III 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ① 勤労青年を「地域の次代の担い手となる者」、「将来、親になり子育ての責任を負う者」として考え、そのために地域に目を向け、地域の活動への参画意欲を高めること、また、子供に多様な体験をさせるためには、親自身が多様な体験をすることが必要と考えました。
- ② プログラムの企画立案及び評価について助言を得るために、外部見識者等からなる企画委員会を設置することとしました。

その構成は、
i 青年の立場から、静岡県青年団連絡協議会、御殿場市青年会議所
ii 企業（雇用者）の立場から、勤労者サービスセンター
iii 青少年教育行政の立場から、御殿場市社会教育課、

- ③ 事業を実施するにあたり、単年度での実施ではなく4年間を掛けての実施スケジュールを考えました。
- 1年目：プログラムの検討と試行実施。(レポートによる中間報告)
 - 2年目：プログラムの修正と思考実施。(レポートによる中間実施)
 - 3年目：プログラムの完成。(報告書作成)
 - 4年目：公立施設、青年教育行政関係、民間団体へのプログラムの普及。

2. 運営のポイント

- ① 参加した若者の参加動機や参加に対する不安などを把握し、次回の活動につなげるためにアンケートを実施し、次回の計画に活かしていきました。
- ② 共同作業による参加者同士の協力や助け合いができるように、グループを作り、作業の役割分担をしてからはじめるようにしました。
- ③ 事業担当者も参加者と一緒に活動を行ないながら、同じ仲間として意見交換をしたり、話し合いに参加し、参加者の行動や発言を注意深く見ていくことで、キャンプの振り返りの時に参加者自身が気付かなかったことなどを、フィードバックするようにしました。

3. 成果

- ① 事業に参加した若者は職場以外での仲間と出会い、一緒に活動することや寝食をともにすることで、互いに自らの考え方や人生観を語り合うことなど、コミュニケーション能力の向上を図ることができました。
- ② 地域に出向いてボランティア活動を行うことや、独居老人宅での清掃活動を通して、他人から感謝されるという体験をすることで青年が達成感や自己有用感を得て、自信を持つことができました。
- ③ 仕事以外の自由な時間をボランティア活動に活用することで、充実した時間と満足感を得ることができ、職場における職業生活にも良好な影響を与えることができていました。

4. 今後の課題

- ① 事業の参加者アンケートからも、参加者は実際に参加してみるととても楽しく充実した内容であると感じているため、何よりも参加者を多く集め、参加者同士の交流やお互いの意見交換の場とすること。
- ② 年間を通じての事業であり途中からの参加も可能であったが、各回ごとにキャンプの成果等を掲載するなどの方法で新しい参加者を募らなかつたため、次年度は各回ごとにキャンプの内容や参加者の感想などを中間報告としてホームページに掲載し、多くの方に興味・関心を持っていただき、途中からでも参加できるようにすること。
- ③ 広報の方法として郵送による青少年教育関係行政や企業等に案内を配付したが、実際に参加した方は交流の家ホームページを見た方や関係者による直接の紹介であったため、参加案内をどのように対象である若者達に届けるかを検討し、効果的な方法を考えること。
- ④ 勤労青年の興味や関心、さらには問題意識を把握し中央交流の家が設定していた教育課題との整合性を吟味したうえで事業の内容の修正を図ること。

6. 参考資料

- 厚生労働省 職業能力開発局 キャリア形成支援室
『勤労青少年を取り巻く現状について』 平成 23 年 3 月
- 子ども・若者育成支援推進本部
『子ども・若者ビジョン』 平成 22 年 7 月
- 公益財団法人 日本生産性本部/社団法人 日本経済青年協議会
『平成 22 年度新入社員 (2,663 人) の「働くことの意識」』 平成 22 年 6 月
- 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当)
『第 8 回 世界青年意識調査 (HTML)』 平成 21 年 3 月
- 厚生労働省
『第 8 次勤労青少年福祉対策基本方針』 平成 18 年 10 月
- ベネッセコーポレーション 教育研究開発センター
『若者の仕事生活実態調査報告』 平成 18 年 10 月

担当：望月省吾・加藤英樹・小久保武